



恋愛はアガリの見ええないゲームです。

小高まあな

## 悪夢

---

「怖い夢を見ないで、ゆっくり休んで欲しいんだ」

彼はそう言った。何言ってるの？ 悪夢は所詮夢だもの。嫌な夢だなんていくらでも見てやる。だから、甘い現実を頂戴よ。具体的には左手薬指につけるアレとかさ

## 会う

---

「ちょっとだけなら会えるよ？」って何？

なんで決定権をこっちに委ねるのよ？ 貴方はどうしたいの？ せめて「ちょっとだけでも会いたいな」ぐらい言いなさいよ！

そこは嘘でもそう言いなさい

## 束縛

---

私は今まで何にも縛られずに生きてきた。

私の周りは「息苦しい」とか「束縛されないのはいいことだ」って言っていたけど、私は羨ましかった。大事にされているみたいで。

でも、生きてきて26年。初めて私を拘束する人が現れた。細い金と光る宝石。私は左手の薬指。

## 別名保存と上書き保存

---

男の恋は別名で保存、女の恋は上書き保存。

だから女は薄情とか言われるけどさ、それってつまり別れてすぐに男は別名で保存して満足できるけど、女は次の恋をするまでそのファイルを、そのまま使わなければならない、ってことじゃないの？

どっちが薄情よ。

## サンジヨルディの日

---

サンジヨルディの日か。

昔付き合っていたあの人は、私があげた本を読み終わったんだろうか。本が嫌いな人だったからなー、と思って笑う。

そしてあの日彼に 再会した。古本屋で。

待て貴様なんで私があげた本を売ろうとしている！ その新品具合読んでないな、読め！

別れ話以来の修羅場に

## オレンジ

---

どこかに王子様がいるかもしれないでしょう？ 可愛い酔いならともかく、醜態は晒したくないじゃない？

だから、と彼女は今日もノンアルコールカクテル。シェイクして作り、雰囲気味わう。酔わないのに酔ったような言動の上手い女の子。

彼女はシンデレラ。

## 問題です

---

問題：貴方が私のことをどう思っているのか140字以内で答えなさい。

答え；好きです。

採点；xx字以内で、って言われた時はその8割は書きなさいって教わらなかった？ やり直し。  
そんなことは知っています。

## 日々ときめき

---

彼氏は要らないけれども、恋がしたい。ときめきが欲しい。きゅんってしたい。

でも、それなら恋じゃなくても、いいよね。

日々の出来事を大事にして、きゅんってときめこう。

そう思ってみたら、友達の優しさにきゅん、とした。ときめい、た。相手、女の子だけど、あれ？

## お説教

---

男ならめそめそ弱音を吐かない。いちいち人を恨まない。なに、学生いいよなー、って。喧嘩売ってんの？

しっかりしなさい。誰にでも泣き言言って恥ずかしくないの？

愚痴があるなら私にだけいいなさい。どうでもいい相手ならこんなこと言ってないの。早くもっと私好みになりなさい

## 可愛くない女

---

可愛くない？

私が可愛い女じゃないのは、今に始まったことじゃないでしょうに。文句があるなら、貴方が私を可愛くしなさい。貴方にしかできないんだから

## 見送り

---

「送ってくれて、ありがとう」

そう言ってマンションのエントランスで別れる。

階段の踊り場で、帰って行く彼をこっそりと見送るのが好きだった。その後ろ姿を見るのが好きだった。

なのに、もうそれが出来ない。

彼が私が見ているのに気がついたから。今夜から、微笑む彼に手を振る私。

## 雷

---

「雷が鳴っているね。怖くない？ 大丈夫？ 君は昔から大きな音が苦手で、花火すらも嫌いだったもんね。雷が鳴っているね。大丈夫かな？ 可能なら今すぐにでも、隣にいてあげたいよ」

そんなカレからのメール。優しい。でも遠恋中の私たち。

私の近所では、星が綺麗に見えます

## 魔王陛下の悩み

---

魔王陛下は悩んでいた。

悩みすぎてあっさり勇者に姫を奪還された。それでも魔王は悩んでいた。

夕日を背負ってため息。

「これが、恋愛感情というものか」

小さく呟く。

「魔王さまー、勇者への呪術はどうするんですかー？」

従者の声も耳に入らない。魔王は勇者に恋をした。

「魔王様ー」

## 月は綺麗ですか

---

「月が綺麗ですね」

「そうね」

沈黙。

「何？ 月は綺麗ね。それ以外の何かがあるならわかりやすいようにいいなさい。誰かの言葉を借りてきてしたり顔で言っているのも、俺賢いっていうのが見え透いてて嫌だ。自分の言葉でしゃべりなさい」

そして嗤う。

「言っても意味ないけどね」

## 変わらない世界

---

気持ちだけじゃ世界なんて変えられない。何も出来ない。

思っているだけでは変わらないというけれども、口にしたところで多分何も変わらない。

それでも、それでも。

「好きです」

変わらない世界を変えたいと思うのだ。

## 慰め

---

人を慰める事が出来ない。だから私は弱音を吐かない。一方的に慰めてもらうのはずるいから

。

でも、彼は何も言わないのに私の気持ちを察して、優しい言葉をくれた。

彼が落ち込んでいるのに、私にはかける言葉がない。全部彼にもらった言葉。

私の言葉で言えるのはただ一つ。

「好きです」

## 煙草とキスと

---

今の彼女とは禁煙を始めてから出会った。まあ、彼女は喫煙者なわけだが、別にそれにつられたりしない程度に禁煙は成功している。

食後の一服を終えた彼女と、一つキス。

ゆっくりと唇を離しながら思う。

煙いつ一か、不味い。

歴代の嫌煙家の彼女に土下座したくなった。不味くてごめん。

## 仮定

---

出会うタイミングが違ったら、付き合っていなかったかもね。

そういう私にいつも彼は「仮定の話なんて意味ない」なんていう。小さな仮定の話に、出会いの運命性を見い出してときめくぐらいいいじゃない。

貴方があそこで私の話を否定しなければ、まだ付き合っていたかもしれないのに。

## 優しさのつもり？

---

「そんなことはないよ、君はいい子だよ」

と、私の愚痴に彼はいつも言ってくれる。

ねえ、でもそれ、優しさのつもり？

いい子だよと言われるたびに、いい子にならなきゃと追いつめられて行く私を彼は見てくれない。

「優しくていい子だよ」

だから叱ってくれるあの人の方に行くね。

## 三つ子の魂百まで

---

昔からそうだ。

課題がだされるとさっそく資料を集め、その本の表紙をみて満足する。読み終わらずに締め切り前日に慌てることになる。

それは今も変わらない。

君への最高のラブレターを書きたくて、沢山の本を集めたけど読み切れないまま書き出している。

クリスマス、間に合うかな。

## 冷え性

---

「手が冷たい人は心が温かいんだよ」

「ただの冷え症」

帰って来たばかりで冷えた指先をこする。

台所から何かを擦る音がする。

「シン、何してんの？」

問いかけると、彼は湯気のたったマグカップを二つもって台所から出て来た。

「はい、冷え症な茗ちゃんに生姜紅茶」

渡されたカップは冷えた指先に痛いぐらい熱い。

「ありがとう」

少ししかめっ面をして応えた。

## 紅茶

---

「紅茶、嫌いなの？」

紅茶が美味しいんだ、と言った私の言葉を無視して、珈琲を頼んだ友人に尋ねる。

「嫌いじゃないけど、嫌なんだ」

そして微笑み

「カノ ジョがいれてくれる紅茶が一番美味しいから」

惚気かよ。そして失恋かよ。はしゃいだ声をあげる隣の恋人達を睨んだ。

告白失敗。

## いいひと

---

いい人と言われる度に思い出すのが、  
「いい人にならなくてもいいよ」  
と言った男の存在だ。  
頑張らなくてもいいよとされているようで嬉しかった。  
「そんなの我儘じゃないからちゃんと言いな」

でも突然、我儘に疲れたから、とふられた。あれからいい人になる以外できなくなった。

## 居場所 1

---

部屋の大部分をしめる赤いソファー。彼はそこで本を読んでいる。

勢いをつけてあたしもソファーの上に。

彼の膝の上に頬杖をついて、寝転がる。

彼は嫌そうな顔をしたけど、すぐに諦めたようにあたしの頭を軽く撫でた。

今日も明日も明後日もあたしの居場所はここだ。

## 居場所 2

---

後ろから彼を見るのが好きだ。

その茶色い柔らかそうな髪。ちょっとなで肩で猫背な後ろ姿。

いつも見ている。

隣になんか立てなくていい。振り返ってくれなくてもいい。後ろで彼を見守るのが私の定位置。  
誰にも渡さない。

私は可愛い背後霊。

### 居場所 3

---

隣の席からいつも彼を見ている。

授業中、ちらりと彼の顔を見る。気づかれないように。今日はちょっと寝癖がついてて可愛い

。

ここが私の席、ここが私の定位置。

私の場所は、隣の席のクラスメイト。彼の隣で腕を組んで笑うのは、まったく別の女の子。

## 手紙

---

やあ、マイハニー！ 元気？ じゃないよね。

うっかり事故死した僕も悪いが、そろそろ泣き止んだらどうだろう。

泣き顔もそそるけど、やっぱり笑顔が一番好きだよ。

この手紙、悪戯だと思ってくれていい。代わりに、読んだらまたお化粧して笑って外でてね。

これが本当の最後のお願いだ！

## リアリスト

---

私は作家で、現実主義者の恋人は「体験していないことを書くな」が口癖だった。

彼の嫌いなファンタジーから作風を変え、彼と結婚した。私の作品は現代恋愛、彼との思い出話だった。

そしてあの日、離婚の物語を書くために離婚した。

私の物語を馬鹿にする、貴方を愛していなかった。

死刑制度廃止論者の僕に彼女が言った。

---

「私が殺されても同じことが言えるの？」

死刑制度廃止論者の僕に彼女が言った。

「犯人が死ねばいいって思わないの？」

「想わないよ」

彼女が頬をふくらませる。

「死ぬのは一回切りだから。生きて生きて生きて生きて殺人犯と後ろ指指されて罵倒されて苦しみ続けることを僕は望むよ」